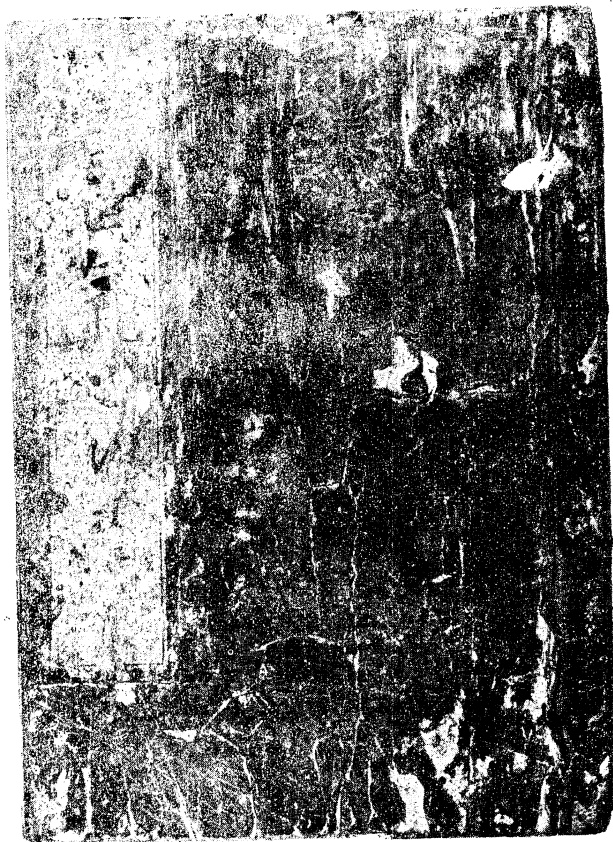




分七寸三 コ ヨ 紙 表
分一寸五 テ タ

シ ナ 梓文本

金金先生著

紅毛書
新刊
金金先生著

當世氣轉草

附
瀬川菊之露

序

鐵炮子曰。休フジノヤニコシラケテ腰富嶽蒼天ヲ笠ツラ以釣渤海之鯢イサ焉。其巨靈之謂クイタホツチ乎。今金金先生之逸群亦然矣。如此戲言能採娼婦之クハ蕩子之情又論妖童評妓界諸家之藝風卓然大之極可使天下遊冶子之傑オモウツ謂然諾諾也。諺曰。嘗ナシ乎盡ナシ矣哉。如先生嘗則盡シ紙シ皿シ而未止者也。頃聞路考下世コトシ彼之鳴於宇宙也。如有鬼神助之則我儕所不能下筆也。

序

鐵炮子曰ク。休フジノヤニコシラケテ腰富嶽蒼天ヲ笠ト爲シ。以テ渤海ノ鯢ヲ釣ス。其レ巨靈ノ謂カ。今金金先生ノ逸群亦然リ。此ノ戲言ノ如キハ。能ク娼婦ノヲ探リ。蕩子ノ情ヲ悉ス。又妖童ヲ論ジ。妓男諸家ノ藝風ヲ評ス。卓然タリ大ノ極天下遊冶子ノ傑ヲシテ然。諸諾ト謂ハシムベシ。諺ニ曰ク。嘗乎盡ナシ矣哉。先生ノ如キハ嘗レハ則チ盡シ。皿ヲ紙メテ未ダ止マザル者ナリ。頃路考下世ト聞ク。彼レカ宇宙ニ鳴クヤ。鬼神之ヲ

因請追善於先生。先生不辭曰。夫踞考天下無比也。無論十目所視。十手所指。閻王已開地獄釜蓋而來此土。顏色憔悴形容枯槁。呻吟瀨川瀨川。則閻王以來未曾有之人也。李白一斗詩百篇。金金一斛書一篇。買酒一斛。即把筆也。則命清酒左舉觴。右揮毫。須臾而成。余受而讀之。嗚呼佳矣。佳矣。衆人左袒沽之。哉。沽之哉。夜以繼日。令刻成。則出焉。有射錢利善哉。善哉。

助クルコト有ルカ如クナレハ。則チ我儕筆ヲ下ス能ハサル所ナリ。因ツテ追善ヲ先生ニ請フ。先生辭セスシテ曰ク。夫レ路考カ天下比無キヤ。無論十目所視。十手所指。閻王已ニ地獄ノ釜ノ蓋ヲ開キ。而シテ此ノ土ニ來ル。顏色憔悴形容枯槁。瀨川瀨川ト呻吟スレハ。則チ開闢以來未曾有ノ人ナリ。李白一斗詩百篇。金金一斛書一篇。酒一斛ヲ買ハハ。即チ筆ヲ把ラン。則チ清酒ヲ命ス。左ニ觴ヲ舉ケ。右毫ヲ揮フ。須臾ニシテ成ル。余受ケテ之ヲ讀ム。嗚呼佳

安永二癸巳閏三月

山陰萬八言書于十三堂



シ佳シ。衆人左袒。沽ハメヤ沽ハメヤ。夜以
テ日ニ繼キ。合刻成ツテ則チ出ス。有射錢
利。善哉善哉。

安永二癸巳閏三月

山陰萬八言于十三堂ニ書ス



當世氣とり草

賓や太平のめてたき

御代のためしには。弓は韃に刀は茶屋に。沖中までのつきだしへは。曲騎來つて賑わひ。藏前からの乗込は擔夫きおつて速し。出る糞喰めしを待たぬ世の習ひ。由來洒落のために。片時もとくまる日月なければ。いけよ。おこれよ。飲や。誦へや。めれんに騒げよ。いきの俠助。しやゝゝらのしやれ藏。なめたかすんはい。一寸さきは闇の夜に。啼ぬからすの音きけば。拾はぬさきの金が戀しく。百兩富を付てみれば。鼻毛は延れと。花も取らす。一かふやけの北里は。やけ石に水で。けつく營作の結構は。昔に十倍し。其繁榮スツトコサイく。太夫格子の九十目六十目には。地下の貧客手さしもならず。是天上の

豪客の樂と見ゆ。中三は貳朱銀出來

てより。勘定小すいこに。つけ廻しは六十目。晝夜は貳角若クハ一角。河岸は六百。此六寸も他の六本とくらふれば。お月さまとなべふた程の遠なれば。其外は云ふもくだなり。絳帳の百女には。供部屋の僕腰を軽くす。品川の十女は古今に廉く。錦の衾の損料にも引當らず。十女の女郎に壹分の男妓。駕ちんの壹貫もおかし。橋向ふの四寸は。四文錢で懷にしやすく。てつきうは波文錢の五十女かと疑はる。中町。土橋一角に晝夜は壹兩。此地の遊。外ッの脱勢局とさらに別なり。妓女の六ッはやぐらより高く。たかいやぐら下は却て貳朱。羽織の娼妓。地女の眞似をして。通りものを誑。去年新宿にごま

のはい出來てより。六百七百四百女。家並まばらに女郎又少し。只ある物とては。糞培馬と甜瓜や落蘇の間屋なり。其風其くらしい品川深川をくだる事はるかなり。氷川見せ付十女。二間もちの女郎なく。時々疊をたゝいて鼠を呼もしん氣なり。神明は四六。根津は四斗。千住の四六は外と前後し。板橋。三間堂は共に貳朱。大根ばたけには奴のもやしの名をとり。鐘つき堂には角へ獅子舞こむ。赤城十貳女に音羽六百。いろはけころは貳百。三百。裾つきは貳朱。あいけふの貳百。四百は。いつか五十。猫茶屋。馬道。入船丁。三角屋敷に麥飯の名高く。黒門通りに佛店。挑灯店に。車坂。てふせん。鳥こへ。六間堀。あたけ。菊坂。綱打場。赤坂田町。三田新地。猪の堀。どぶ店。万福寺。やぶ下。市兵衛。鮫が橋。數ある中にひとり煩惱のきづなを離れたる

は。神田田丁に大橋はしづめ。其さま其風俗ならず。又その味淡く。水の如にして。無味の所より。自然と微妙の味を生ずるは。光野山にて廣法大師。涎を流して考へられし衆道なり。其衆道。廣法大師はじめ給ひしにや。お初太夫子は。太夫棧敷の打ぬきより有難く。なみの娼童に樂屋新道は春宵斗でなく。いつでも一刻價壹分。則辰年の石工と同じ。霞丁神明は其風ひとしく。湯嶋。平川又同じからず。地代赤城に花房丁は。常に霞丁のゑらみくすなり。概此衆道は。どこもかしこも。お初穂には替る事なし。堺丁。吹屋丁。木挽丁ばかりは。其お初尾異に。其風も又別なり。名代新下りの總角も。お初穂はかはらねども。行るゝに従つて。其冥加錢は參詣の心もち次第なり。しはあれども。前とうしろのちがいば

かりで。其通ひゆくものゝ戲家の情は。みな一なり。暫時の逸樂に甚しきは家をわすれ。身を失ふも有。少年せき込ては。爺なければよいがとかこち。お屋敷たたらされては門のかざりをうらむ。家業のいとまに我身をぬすみ。家の出入に人めを忍ぶ。自ら稱して通りのものと。めつたに云洒落と氣とりと。髪のものすきは。後ろの中すり。さんたはら程剃ひろげ。鬘の毛ねすみの尾に似たり。自ら云癩疫本多と。華蓋石佛の眉より細ふして。自ら稱す癩風眉と。腰にたばさむ細身の河鯨鞘。右に帶一ツ。藝瓢。梅花鞘はさながら水菜煎に玉蜀黍を貼たかとうたがわる。印華布の細帶。戴骨をしめ。細毛布の三徳鳩尾へさし込。柳條鞆の小袖も酒かびあらはれ。八丈の襦も少し色さむ。鼻に見へる色男。顔は黒ふしてきせるは白し。三まいの徳輿も翹なきを恨み。双

觶の猪牙も鱗なきをもたゆ。潮引てはつき出し石垣高し。月皎々と照ては。其俤ますゝ床しく。雪ちら／＼としては。其すがた髣髴。土手の風景海はらの眺望も。心こゝにあらねば目に見へず。程なく入込茶肆のもてなし。牽頭妓女のしやれ頓作。下戸は祝ぶたの佳味へ付こみ。上戸は水肴の淡きをこのむ。興たけなはに時移り。下戸も上戸も泥の如くに。牽頭。船舍。茶屋。藝者。とも／＼およぎ出す縦横十文字。初會の見せのまばゆきも。牽頭末社にくるめられ。よふやく蔭子廊下へかゝれば。拍子木なふして女郎ひさをなす。子どもやお茶を汲めの聲あれば。若きもの付來り。慎んで手をつかゆるもおかし。見たてさし名のおもいれに。心まわらぬの唄あれば。のろま胸をいたむ。おしへしさしぬきわり付とてより。待事しばらくにして。出てくる

外面如菩薩。本多番には何本もさす。かんざしは金。櫛は奇南香。たばこ盆さかづき臺は禿のせいとひとしく。初會の盃事は。其おもむきふるく。お定のソツチャダヘンセヒ鉢。祝ふたにくらひ物のなき。妓女末社がしやれの數々。長哥のキイ聲。こはいろのわれ聲。三絃の高音。とり／＼さま／＼。お客は鼻毛を算れる最中。喜の字弁天臺來り。新造もる事しきりなり。牽頭末社に飲且くらひたのしまれ。お客は卓とする。女郎は目をすへる。やゝ時うつり料理出れば是をきはとし。娼婦は坐敷つんたち廊下はた／＼。隣り部屋での儼嘴且茶碗酒。お客初めてためいきをつき。嘗て志す處の祝ふたにかゝる。程なく床廻り新造かむろ來つていざない先たち。初て入芝蘭の室。まづ長持のどふばらで。おてきの定紋を覺ゆ。床かい棚の巧は。いかなるやつ

の物すきと。掛物おき物飴りもの。香鼎いけ花丁子風呂。料紙硯に唐卓子。源氏湖月に万葉抄。樂器投壺に琴三絃。鼓司尺八長行局茶盤。吹雲太鼓に將戲盤。衣櫛にはかく羅綾のころも。長持にはつむ錦繡の衾。金壁の画は誰が筆ぞ。席の上のかびはどこの奴の反吐ぞ。なんのかんの／＼お定り事も済て。りきんでわざと嫌がるよふなふりするものを。無理に屏風の中へおし込。新造かむろなぞたばこ吸付る間も久し。牽頭末社に茶屋舟合は。明ヶのむかいの刻限を約し。跡しら川で下へおり。女郎とも／＼寄合て。客の鼻毛のかす／＼を云たて。わらひなぐさみなどするもにくし。お客はたばこもよつ程廻り。湯茶もとつくり循環し。屏中褥上獨りためいき。欠じ。伸し。長くなり。短くなり。待事良久して。モウ來そふナ物だ。坐敷の内から何もきらう舂

も見へんだれば。いかなモウ來そふな物じやと。待と。くらせど。いかな來す。よふ／＼歩檐に上草りの音すれば。イヤ來たぞ。是なんめりと。ちやんと寐たふりなぞして。かたづを吞て居て見れば。新造め來つてたばこなぞ出し行。へ是はすこたんだと思へども。しかたもなく。又たばこ湯茶なぞ用ひかけれど。淋しさはさみしく。家の首尾なぞの事が。いとゞ氣に懸り。いろ／＼と獨り述懐し。臥し居ける所に。又しも上草りの音すれば。是こそ急度てき來たりと。又前の如くそら寐入なぞして。少し舂の音鼻へぬかして居ければ。又今度もそれにはあらで。隣り部屋の女郎めが。もふはや掃除にいつて歸るなり。いとゞいま／＼しく氣をもがき。これはマどふしたものだ。何をしてどこにけつかるかと。獨り切齒思へども。さながら呼びにもいかれね

ば。どふも仕かたもなく。こんなす
いやつに取あたつたが。今夜の不運な
れば。いま／＼しい。いつそ今から茶
屋めを呼にやり歸ろふか。いや／＼ひ
よつととめてなく歸された時には。あ
らほどの玉を得ながら。から手で歸る
は何とも残念。今しばらく辛抱せんと。
むねの動氣をなでおろし。とやかくし
て居るところへ。思ひがけなくすつと
來られたれば。南無三寶とすつと寐た
ふり大駭。おてきは例の定リ口上 ヨウ
寐なんしたそふなね。目をさましなん
じ。ロツチヤ今まで下の坐敷で。投壺の
稽古を見ていゝしたと。云と客めは寐
入たふりウ、ウ、ウ、ウくらい目のさめた
ふり。細目におてきをちよひ見れば。
また寐をらずに枕もとで。よふ／＼さ
の字なりくらゐの事で。たばこくゆら
せいるも大きな思はせふりなり。よふ
やくにして屏風たて廻し。夫より後は

いさしらず。元より予が筆刀も及ばす。
明々の七ツが鳴ると間もなく。茶屋出
むかいと聞よりも。女郎は嬉しさ年
明の思ひの。ろまは名残おしけれども。
初會といふ茶屋のまへ。是非におよば
ず起上り。手水其外衣紋なぞ取つくろ
い。ウジカへすれば。むかいの來し上か
らは。其間もうるさく。ちつとも早く
歸したけれど。東方未明モチャット居なん
し。と云ながら。羽織手づからうしろ
へ懸るも。ちつとも早く歸したいこゝ
ろなるに。そふは氣とらず。のろまは
天女に羽衣をさづかりし思ひ。ゑりも
とからぞつとしなから。紐取むすび。
別れのさかづき姜みそに乾梅を味ふ。
漸夜もすでに明ちかければ。のろまは
心残れども力およばず。階子をおりれ
ば。女郎は夢中で送り出す。見せさき
の不寝番。草りをはかせ。ガラ／＼ヒツシ
ヤリントおろせば。女郎は是から本の

女悦に越るも有。又はそこゝ寄合て。
夕の客のとり／＼噂。たかひにいひ
ならべて笑ひのゝしるもにくし。むま
事棚さがしと号しては。硯ぶたのつま
み喰。鯛のあたまをかんざしでかちつ
ては。茶盤のひやぎ。重さかな。硯
ぶたこと／＼喰盡し。蠟色の衣箱よ
り取出すざせん豆。崑崙瓜つけ。蒔繪
の椀にも。雪花茶の烏麻いり。蠟蜋の
むきみは藥玉のふた茶碗へくすね。小
たんすの鎖前引出しには。甘露のいて
ころばし。櫛匣のかけこにも青春ので
んがく。神主の吸物は行燈の下さらで
あたたむ。さふ三人でもやいし豆腐。
今喰ふ饌の實。たらふくうんと喰込
て。初めて寐れば。風呂わひて見せさ
き掃除最中。一睡二眠寐ておきる。四ツ
半。九ツ前。寝おき湯上り。其つら飼
面だらけ。麥麩粥は二人もやつて壺
文づゝ買。鏡は奩ばかりで鏡架に輕し。

近年女かみゆひ行れてより。或は月極
メ。あるひはふり。ふりの本結は貳百
に極る。本多は百に。なで付は五十。
口利雑談かしましく。身しまいはかど
らねば。下からさいそくしきりに來り。
漸粧成て又見せ坐に着く。茶碗酒に
かいくらひ。間夫のちよひ逢ひ。質の
やりくり。其奥。その穴。其實を知て
は。餘り骨折て命から二番めの金銀を
ついやし。御意得る程のものとも思は
れず。去ながら。人の好惡は人のおも
ての同しからざるが如くなれば。只其
人のおすきな事をやらかして見らるゝ
が幸甚ならん。ましていづれ遊戯の事。
戲氣たわけをつくすのも修行なれば。
是も一時かれも一時なり。

賊に太平のしるしとて。昔も今も變ら
ず。日に増し繁榮するものは。東都に

三ツの優戯場なり。則ち樂の餘風にし
て。寔に治世の遊び。人を和するの器。
善をすゝめ惡をこらし。憂をわすれ鬱
を散し。治平に居て乱世のおもむきを
しる。少年も仁義のはしくれを喫つけ。
女童も自然と古人の姓名をきゝかち
る。先づ霜がれの霜月にも。年々かわ
らぬ顔見せの賑はひ。中々他の事の及
ぶ所にあらず。此地よりまつ一陽來復
す。入替り定れば。妓男つけ四方に廣
まり。下り役者の乗込は廿七日を極と
す。來る人逢人迎の人。めつたに祝ふ
おめでたいと。祝ふて一ッ打ませふ。
初詣のさかづき。肴の一角。千早振神
無月になるやいな。所々方々から棧敷
の云こみ。前後をきそふ。積物銭と
して山をわらひ。やぐらの幕のあたらし
しき。招牌はたちまち數頭の彩雲をあ
らわす。來る人。行人。止る人。見物
の群集はさながら簾にこにやつく讀饒

の如し。行んとすれども行れず。引ん
とすれども引れず。足地を踏ざるにお
されてすゝみ。もまれて戻る。實に容
錐の地なし。木戸の仕着せは定紋そ
ふて。鮮に。仕切場とめ場の俵風俗。棧
敷番のおとなし顔。半疊中賣火なは賣。
左右の看棚は鱗魚のすしの如く。内み
す太夫新格子。向ふさちき土間さちき。
中の間追込切落し。羅漢臺はさながら
人で造つた階の如く。戲臺のすき間
は木曾海道の蠅のごとくに集。茶賣の
不遠慮に大股なる。割込酒直を取て却
て人のひさを痛む。籠餅おこしみかん
／＼めりやす長うた新淨瑠璃。しばら
くのせりふはへ。みかん喰盡して皮を
投る事。恰も蜂の起るが如し。幔あけ
少しおそれれば手を打事。百千の雷
も一度に落くる斗にて。貴賤老若僧俗
男女。魂飛び胸さはぎ。耳へ指の杓を
こむ。棚屋は元より花美を盡し。大臺

の造り松は枝をさかへて五尺間口へは
びこり。くわし臺八寸盃臺。さかなす
い物祝ふた。香盆かけはんおき巨燵。
器物調理の潔き。女中はタア一かふ
寡す。夜通しのしたくの鉛華は。中入
を待ずに班に。棧敷うら道狭ふして髯
さし邪へになる。茶屋に壹分の擲あれ
ば。若ヒ者来て御機嫌を取る事しきり
に。せまい所で汁吸物をもるも。ならひ
しよりなれわざ。切落の雑入は。茶を呑
事も隨意ならず。棧敷の吸物のいけを
羨む。お國侍は間戸明りのかたふくを
見て歸る事しきりに。地廻り下駄組空
色合羽はこゝをせんどゝ入込。ハイモシ
ちつと入れてくんねい。今出ていかあ
なには。いかなる飯にかへての好も。
おのれが膝をかくへていれる。ひざの
上の尻にふせうのならぬ喧嘩あれば。
留場来てつかみ出す。鈍鳴やめば道具
立揃ひ。囊束出来れば拍子木かちつ

く。間もなく讀立る妓男かへ名の次第。
花道の出端には祝ふて手を打。引合の
株廣めの口上。家との風得手の藝。
實事あら事惡和事。おやま方娘方小詰
中詰色子たち。根元の中村座は。しは
／＼出す二のかわり。三の切。親玉海
老になつて臭氣絶へす。市紅物故しよ
り一座評判嫁入る。秀鶴が高名日々に
天に冲り。おすもへすも伸とでありし
に。一朝病に臥してよりとり／＼さま
／＼の評。又は此世を悟りきり。墨の
ころもに身を染て。狂言綺語を離れし
といふもあり。あるひは狂氣亂心物の
氣なぞと云なせしが。幸なるかな恙も
なく快氣有て近頃より出勤。此上もな
き世上のよろこび去ながら。病後の事
にてさしたる仕打なく残念。しやれの
先生は松本になつてもしやれ。あんば
いよしの煮賣は專にさじさへうれ。清
玄か謀叛は念珠のきれしよりおこる。

みた次郎さまにはワッチャ眞實心中車。
五郎は株の拔萃。まづ評判一座に鳴
る。芳澤が阿古屋は慶子をもとき。氣
どりは春水の漲るが如し。岩井がおは
つはいつもぼつとり。外のあたりに杜
若なく。仕打の乱れぬ一輪咲。その香
かふばしいと斗の評判。大谷の友印は
革たび賣の門兵衛であて。かみなり瀬
平で今に雷鳴。月の輪の傳三は天幸ち
もなく大きな聲でいさぎよく。あいこ
の若はいと海丸し。市村が土木は法器
の晩成。けつく元よりよいとの評判。
太夫梅幸が三役四役は覺悟のまへ。景
清五郎は元よりお家。梅幸が十郎。か
ぶの重忠。雷子は臍をさらつて二十五
丁さかつていよ／＼鳴。吾妻で仕込だ
あこ屋は偽替女の巧者な仕打。お寺小
性の吉三は菅原八重已來の當。民とも
になんしをよろこぶ。かわゆらしいお
七は。師匠うつしと江戸中で雄二郎。

十町が五郎丸はいさぎよく。杉曉が與吉は。目黒の先生の跡だから不譽。跡をはねさせんと欲する團三郎。同三が仕打はまづのはね。松は久しいものなればとて。松助が仕事し與丁久しいもの。いまだ太神樂の曲はちとはねず。堺丁吹屋丁を去る事二十五丁にして。妓男もしげる森田の座。中富此地へ下つてとかく兩座の入を奪ひ。古今の當りを取妙術ます／＼あらはる。僞勅使の二度出は体めつらしく。初めは悠美に後はおかしみ不淺。女景清の闘手づよふしてしかも愛あり。椀久の所作は殊さらに妙に。女由良石なみの仕打は落着てりきみなく。當時たへて仕手なし。付添ふ野鹽が艶色。見る女中には上氣せぬものもなく。万歳のさいわかは五郎の堀出し。草摺引の勇猛なる。三ッはた姫の泣出しそふな。判官の奥方では山の井へ賄賂二千兩。山下が艶

情には誰もゑりもとから。そつと秩父の重忠の奥さま。しりと藝とは飛んだもの。素袍大紋の出立は。うしろの挑灯さながら山の手の火事の如し。みやぎのゝ花のたては。又一入の花やかさ。いつもかわらぬ艶仕打は。本に今でのかん／＼作。三舛が三階の羅漢は。どふやら如重卵。工藤の死装束はめづらしく。初春といふちといな物。お家の外郎も此春はうれす。十藏が鬼王はさながら兒輩の爭走くら。例の友きり丸をさがしては打擲せられ。水激龍躍り。名劍尋ね得るに至ては。其勇壯江戸中の目をおどろかす。石堂は勇美にかたく。寺岡平右衛門は女房のあたまを。足でおさゆるもおかし。雷子が朝比奈は飛んだ思ひ付。みやこ言葉を楚語になまるも面白し。又京ノ次郎の旅すがたは餘りやすく。三ッはた姫と姫の仕打はお家。百姓次郎作で頓氣の度兵衛。

上下での舛とりもおかし。是業か同三も續て勘平となれば。謎を取られてさわぎ。二ノ宮判官は山の井ぬにけしめられ。思はぬはらきり。御家老の長十は竹べらて一入の苦痛。魚樂強盜をやめ人からを繕れば。却ておちを失ひ。翻風が九太夫も刀をぬきかくれば。久しいものかひがはへると笑わる。笠やが佐五左い飛脚の本田。いき引きらぬに吃。奴の立往生。三國が山の井は。工の山事おのが名よりも高し。コッサリ／＼に至てもその樞機はあやまたす。切幕上ゲみす上ゲ紙格。拍子木引較道具たて。囃子方は呂律を極め。作者は智ぶくろの底を振。年々新下り入替り。其さまその態を盡し。顔見せ程なく二の替り。後日の曾我に曾我祭り。土用やすみ秋狂言。又顔見せの入かわり。四季に絶せぬ見物はエイトフ／＼又エイトフ實に治世のたのしみなり。

附錄

瀬川菊の露

高明は鬼神かならずこれをにくむとかや。去る程に路考は其藝才艶色。みな世のしるとお。千万人にすぐれて。世上に古今獨歩とてはやされ。染もの帯にも路考茶の名をとり。櫛振子かんとし糸まき手拭い團扇までも。ゆひわたの紋あるをば。男女老若ともにまづ嬉しが。世のあいけふ最厚しり持大かたならず。爰に過つる卯の年四月頃よりも。何となく風の心地にて例ならざれば。醫療祈念におろかもなく。元より路考王子の稻荷は故有て信心の事なれば。祈誓をかけまくも。何とぞ此度の病氣平癒致し。ふたゝひ戲臺へ出る様に／＼にと。身内近き何がしを頼みて。一七日の内通夜をなし。一心不乱に祈念淺からざりければ。神も納受やし給ひけん。一七日に満する夜。ぬむるともなき枕の夢に。社檀俄に鳴動し。稻荷大明神御聲高く。

出さいでとふせふ。出さいでとふせう。もとが王子の稻荷の子じやもの。出さいでとふせふ。出すとも出すともと。あり／＼との夢ごうち。さては今のの正しく稻荷大明神の御告ならん。嬉しや祈りし甲斐有て。出さいでとふせふ。出すとも／＼。との御託宣は。全く病氣平癒いたし。早速出して下さるとの御事と。誠にありがたさ肝にめいじ。社檀にむかひて三拜九拜。其まゝ宿所へ立歸り。昨夜一七日に満する夜。眠るともなき枕の夢に。かく／＼の御告ありければ。程なく病氣平癒あつて。やがてめでたく戲臺へも出るやうになるべしと。路考聞よりコヘ有難き御告かな。稻荷の御神いまだ我身を御見捨てなふ。出してやろふとは有難い御尻もち。妻子の歡び大かたならず。座本までの大よろこび。いよ／＼祈念怠らざりければ。誠に御託宣の加護によつて。

日に増し病苦くつろいで。顔色もいつとなく直り。朝夕のものとて次第にすゝみければ。全く以て稻荷の御蔭斗で。今度の長病恙もなく平癒したれば。何かを差置ても親玉稻荷へお禮参りと。頃しもはるの事なれば。天氣も續てうら／＼かに。四方も霞で飛鳥山。八重と一重を咲ませて。淺からざる興もあれば。駕供の者なぞ。それ／＼に云ぐし。携重提爐なぞ取とへのへ。賑しく参詣し。猶も祈念をぬきんで。日も夕陽を限りに宿へ歸り。彼や是と快氣の程をこゝろみるに。いよ／＼の全快なれば。さらば近日日がらを撰び。出勤せんといければ。家内は元より座本までの大よろこび。路考は猶も親伯父の跡をくみ。瀬川のながれを深ふせんと。久しぶりにて辰の二月廿日より出勤。サア出るやいな俄の大入。其評判天下に鳴り。武度の顔見せ。古今

に稀なり。時に仕打は女朝比奈のやつしにて。實は傾城舞鶴を動らるればとて。桂のもよふに舞鶴を縛せられしが。其鶴しりきれ鶴であつたやら。出ると其まゝ十日も立ぬに双方丸焼となる。是非に及ばず。路考もまづ深川邊の妾宅なぞへ引うつり。そこゝと病後をいとひ居られしが。時なる哉。命なるかな。又しも同じき夏の頃より。心地例ならず。深くいたわる所ありとて病の床につき。其體さらに輕くも見へず。氣遣はしきよふすなれば。妻子厄介のこゝろの内。初めに増る一入のうき思ひ。路考病氣日に増しつゝの難病にて。醫療醫藥も驗なき事なれば。今一番むしかへし地ざりにならふと云はらで。稻荷さまへ祈誓をかけずはなるまいと。身うち其外皆寄合ての評議。座本市村よりは猶さらの事。是までの病氣と云。又今度のむしかへしと云。

とかく一通りの病氣と見へねば。何とも安堵ならず。もしや此人に若しもの事でもあつた時には。たとへ此節芝居の普請出来たればとて。此さね柱ない時には火の入とても心もとなく。彼是以て内外のため。是非に今度も。王子の親玉でなくばいくまい。あなたは外とも思しめさぬ事じやに依て。あまへるぶんな大事ないから。ひらに親玉への祈誓をこそと云つのは。妻や子ともはなる程と直に其意に任せつゝ。いそぎ王子へ代參として。身内の何がしをぞ遣しける。程なく王子の宮居へ參拜したれど。たん／＼のむし返し的事なれば。胸ほどき／＼しながらも。神の告をも待て見んと。まづ六日七日と通夜し。今夜は勝負聲の懸る夜じやと。角大師のよふになつて。七日の夜をはりつめたれど。夜通し何の御沙汰なし。是はいかなる御事やと八日めの朝。本

に狐に玉を取られたよふになつて居るところへ。路考が宿所より人來り。昨夜七日に満する夜なれば。定めて度御告あらん。其よし委敷聞たしといへば。いゝへ。夕は巢をかへられたか。こつちへは何の御沙汰もござりませぬ。是もわるい事でもござるまい。坪ふりの役じやから。勝負聲の懸るまでは。いつ迄なりとも待ませふ。かならずこちらをばお案じなされますといふ歸し。猶も一心不乱に籠り居て。程なく二七日とたちゆけども。うんととも。更に御告なかりしかば。いよ／＼信を取て。今一七日合せて。三七日通夜しなば。などか勝負の付ざらんと猶も祈念をこらしつゝ。程なく三七日に満する夜。はや丑みつも程近く。社頭の神燈殿と。いともの凄くすみ渡り。眠るともなく夢ともなきに。社檀虛空に光りを放ち。珠の屑をおしひ

らき。白髪たる老翁^{ろうおう}稻^{いね}の若穂^{わかしほ}を撥^はひ。階^{きざし}の下におり立給ひ。善哉^{ぜんさい}とゝわれはこれ。是まで路考^{ろこう}がかけ身をはなれず。加護^{かご}なす所の王子^{おうじ}稻荷大明神^{いねがはひ}なり。先に彼^{かれ}が病氣^{びやうき}のところ。我を祈^{いの}る事^{こと}の切なるにめて。通力^{どうりき}を以て本復^{ほんふく}を得させ。則^{すなは}戲臺^{ぎだい}へも出せし處。又い今度の打返^{うちかへ}し。是全く天^{てん}の赦^{ゆる}さぬ命數^{めいすう}なり。今爾^{いま}何ほど信^{しん}をこらすとも。只一たびじや。一たびじやと。宣^{のたま}ければ夢^{ゆめ}の内にも。さては再應^{さいおう}の願^{ねがひ}とては御納受^{ごのうけ}もなき事かと。稻荷大明神^{いねがはひ}の御裾^{ごすそ}へすがり。ア、ラ お情^{なさけ}なの若稻魂^{わかしほたま}ヤナ。祈誓^{きせい}ねがいも只一たびは御納受^{ごのうけ}有て。二度と叶^{かな}へて下されぬとは。それは餘りお胸欲^{むねよく}さまよ。去ながら。無理^{むり}にコッといゝあら立ても。こつちは凡夫^{はんぷ}のすべたの身。おまへは通力^{どうりき}變化^{へんか}のおや玉。腕^{うで}をしてはコッヤ叶^{かな}はぬ。馬矢^{うまや}の振舞^{ふま}喰^く内。尻引^{しりひ}からげて歸^{かへ}りましよ。

去ながら。只此上のお情には。是ぞといふて家内へ見せる。憊^うな證據^{てんこ}を下されかし。それを規模^{きぼ}に立歸^{たちかへ}り。路考^{ろこう}初め家内^{けいだい}のものへも見せ申度^{まうど}いと。念頃^{ねんぎやう}にねがひければ。稻荷大明神^{いねがはひ}重ねて宣^{のたま}はく。善哉^{ぜんさい}と。神妙^{しんめう}なる今汝^{いまな}が願^{ねがひ}。尤に思ふなれば。いで／＼印^{いん}をあてへんと。内は何かはしら紙^しに。封^{ふう}じこめたる御符^{ごふ}のてい。いそぎ宿所^{しゆくじよ}へ持參^{もさん}なし。早々封^{ふう}をひらき見よ。内に三字の文字ある程に。其意^{そのい}を考へ判讀^{はんどく}せよ。ゆめ／＼疑ふ事なかれと。聞^きとひとしく夢^{ゆめ}さめて。忙然^{まうぜん}と起上^{おきあ}り。四方を見れば。件^{くだん}の御夢想^{ごむそう}に授^{あづか}りしところの御符^{ごふ}。我枕^{われまくら}もとに有。是こそ物よと。とるものも取あへず。早々宿所^{しゆくじよ}へ立歸^{たちかへ}り。昨夜^{さや}忝^{かたじけなく}も稻荷大明神^{いねがはひ}我枕^{われまくら}上に立給^たひ。眞^{まこと}ゾかく／＼の御告^{ごこ}あつて。則^{すなは}ケ様の御符^{ごふ}をこそは。夢中に授^{あづか}りぬと。事^{こと}もくわしく云立^いれば。家内^{けいだい}をはじめ

宿老^{しゆくろう}も寄つどひ。取る手もおそしと披^ひき見れば。何とも御符^{ごふ}らしくも思はれず。一タヒとばかり片假名^{かたがな}交^{まじ}り三字あつて。外に何にもなかりけり。是はかはつた御札^{ごふだ}かなと。皆々不審^{ふしん}しながらも。誰有^{たれ}て一人判讀^{はんどく}するものもなきに。漸^{しだ}く一人言出^{ことい}せしは。此御札^{ごふだ}の三字の意味^{みぎ}。皆さまには何と思しめしひや。我等不及^{われらふたふ}ながらも。漸此三字^{しんし}の意味^{みぎ}を考付^{かんが}申^{まう}ふ。只今判讀^{はんどく}致^{いた}べく得^えども。甚^お以て歎^{なげ}かはしき御事^{ごじ}にぬへば。此場^{このば}で考^{かんが}の趣^{おも}申^{まう}演^{えん}ひとて。今となり詮^{せん}もなき事にぬあいだ。判讀^{はんどく}の義^ぎは御用^{ごよう}捨^{すて}に預^{あづか}りたい。さて／＼是非^{しぜい}に及^{およ}ばぬ御事^{ごじ}かなと。涙^{なみだ}ぐみて見^みへければ。家内^{けいだい}のものはこゝろならず。たとへいかなる不吉^{ふきつ}不善^{ふぜん}の御告^{ごこ}なりとも。神慮^{しんりょ}いかでか疑^{うたが}ひ申^{まう}さん。はやとく／＼と御判讀^{ごはんどく}。承^{うけ}りたいと有^あければ。なる程^{なるほど}左様^{さやう}ござりそなもの。只お歎^{なげ}の所^{ところ}を察^{さつ}し

入。申兼いへども。私とても親戚の事。申さぬ時は伏藏致すに似て。且は本意にもござらぬから。さらば私考の通判讀致まじよふが。何もさしてむづかしい判談でもござりませぬ。一タヒと申す三字の字畫を一ツにして見れば。死と云文字になります。これ全く病終に平愈せずして。死すると云御告なりと。いへば家内を初めとし。一坐に在あふ人とも。なる程／＼其御判談。少しも神慮にたがふ事あるべからず。此御告を聞上は。最早看病介抱にも力なく。妻子は正體あられもなく。取乱したる其有さま。路考も苦しきまぐらをあげ。せつなきいきの下よりも。最前よりの委細の様子。我日頃信心なす所の王子より。今其通りの御告ある上は。いかで病の平愈すべきよふもなし。とても人間の定業は免れ難し。今歟くとも甲斐なき事。是までの命數ならめ

とありければ。妻子は元よりあるにもあられず。吉次雄次もいだきつき。連も叶はぬ御命。御身まかり給ふとも。われ／＼かくてある上は必しも。跡の案じは。給はず。未來佛果を得給へと。いと念頃に臨終を見とゞくれば。さも嬉しげにうなづきて。何かいはんともがけども。はや絶脉に舌こわり。次第に落入るだんまつま。嗚呼時なるかな。命なるかな。行年三十三歳を一期となし。安永二癸巳年閏三月十三日終に空しくなる。人々夢の心地にて妻子はわつときへ入斗り。目もあてられぬ有様なり。扱しも有べき事ならねば。野邊送の葬儀取行ひ。本所押あげ大雲寺へぞ葬むりける。法名正覺院櫻譽十阿方順居士と。石のしるしはいちじくく。ひいきの人のなみだ雨。くちぬたもとはなかりけり。

世を去ぬれば。此後芝居もさぞや。物たりぬ風情にやあらん。誠や路考は幼年の頃よりも。數おゝき妓男の内をひとり抜んで。人のひいき世のあいけふ。隣り芝居でも追善野送りの狂言をし。向ひ町でまで。慶子が石橋を追善にすると言ほどの事。餘り希代の名譽を取し様。全く凡人とは思はれず。かねてより沙汰しはべるは。路考幼年が何やらん。鬼神の付添居て。生涯の内命後までも。力を合せ加護なし給はるときく。是は定めて路考故郷の王子稻荷がと思へば。なか／＼左様のまだるい神ではなきよし。大形は天狗のつき居たならんか。何にもせよ。よいめでたい神さまに見込れしゆへ。一生死後までの仕合せ。野邊送りなみの日にも。此御神末社けんぞく。聊しくあらはされたり。また其外にも病中命後まで。此御神の加護奇特。及ばぬ筆にも書

べたき事どもなれど。神爵とがめ恐れ
あれば。中々こゝにはしるしがたし。
又ツタ元より。瀬川の流れは廣ふして。
末汲ものゝ多ければ。跡の路考も見へ
てある。又二代めの評判を。松のうら
葉のすへまでも。恵みのふかき
君が代は。さかへ／＼てめでたけれ。

跋

金々先生既跋付書、
嘆云。世人皆癡^{バカ}。
余獨^{リカフ}哲^チナリ。鼻ノ高キ
千丈。舌一萬里。

金々先生既跋付書、
嘆云。世人皆癡^{バカ}。
余獨^{リカフ}哲^チナリ。鼻ノ高キ
千丈。舌一萬里。

跋

金々先生既ニ此書ヲ編シ終リ。嘆シテ云

ク。世人皆癡^{バカ}ナリ。余獨^{リカフ}リ哲^チナリ。鼻ノ高キ

コト三千丈。舌ノ長キコト一萬里。其ノ極

億兆ノ金ヲ得テ。日ニ天竺ノ頑童ヲ犯シ。

紅毛ノ戲場ニ徘徊シ。時ニ中華ノ青樓ニ

遊び。以テ壯年ヲ樂マント欲スルナリ。豈

愉快ナラズヤ。昧僧^{マイモウ}嘗テ謂フ。天上天下唯

乎。唯修夢謂。天ノミ
 不唯。亦如多。想。下
 二千七百九十五年
 夢。道。上
 云。突。題。



我獨尊ト想フニ當ニ二千七百九十五年
 前。金々カ爲ニ道フナルヘシ。

雲
 突
 題
 関

安永二癸巳年四月

書肆 安原平助版

安永二癸巳年四月

書肆 安原平助版